The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「源氏物語絵巻」試解 : 東屋の巻第一段
Author(s)	玉上, 琢弥
Citation	語文. 1974, 32, p. 34-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68621
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「源氏物語絵巻」試解

――東屋の巻第一段――

玉上琢弥

「源氏物語絵巻」の詞書を、その絵とともに、そのままに理解しようという試みを、わたくしは何度かしてみた。「隆能源氏絵詞蓬生鑑賞」（関西大学「国文学」昭和三十五年十月号、拙著「源氏物語研究」収録）、「源氏物語について」（慶応義塾大学折口信夫記念講座「古代学」昭和四十八年十月四日、中央公論社近刊）の、前者では蓬生を、後者では宿木第一段を扱った。また「山岸先生頌寿中古文学論考」では、この絵詞の誤写訂正の問題を扱った。ここに池上教授退官記念号に、東屋第一段を扱う。いま、過去の拙稿を列挙して、いずれもが大先生の記念のためのものであったことに気づき、その偶然におどろく。風巻景次郎・折口信夫・山岸徳平・池上禎造の諸先生は、わたくしに大きな影響を及ぼした方方である。そして「源氏物語絵巻」は、わたくしの学問への道を決定させた一要因である。感慨なきをえない。

「絵詞」校勘記

常陸の介の実子でないと知れて、少将との縁談が破れた浮舟は、腹違いの姉、中の君のいる二条の院に居候したが、匂宮におびやかされる。そうと知った中の君は、浮舟を呼び寄せて慰めようと思う。折しも中の君は、髪を洗っていたのであった。

以下掲げる絵詞は、わたくしに句読を切り、濁点をつける。引用する諸本は漢字をあて歴史的仮名遣に改める。なお、青表紙本と河本本とが大略一致するときは、「諸本」と称しておく。

○いとおほかるおほむぐしなれば、とみにもほしやりたまはねば、おきゐたまへるも、いとくるし――諸本「とみにもえほしやらず」と「え」があるが、あるほうが分りよい。「給ふ」がないが、「給ふ」はここになくとも、下に「起き居給へる」とあるから、差支えない。　諸本「苦し」と「いと」がない。

○しろきおほむぞひとかさねばかりにておはする、ほかげはなやかにてをかしげなり――河内本「ほかげいとはなやかに」、別本の御物本・保坂本・池田本は「ほかげはなやかに」と絵詞に近い。青表紙本は「ほそやかにてをかしげなり」。別本の高松宮家本・宮内省図書寮本・国冬本は「ほそやかに」と「て」がない。いずれでも意味は通ずる。「白き御衣一重ね」という下着姿だから「細やか」である。下絵には大殿油が描いてあったが、画面がごたつくと考えてであろう、仕上げでは塗りつぶしてある。しかし、大殿油は必ずあ

ったはずで、浮舟を匂宮がおそったとき、ゆきあわせた右近は、「あなくらや。まだ大殿油も参らざりけり」と言っている。夜になっていたのだ。この絵詞に引かれた部分にも、「ひのかたに背きてゐ給へるさま」と言い、「ほかげ、さらにこそと見ゆる所なく」と言っている。大殿油は当然あったのであって、下絵に描きこんだのも当然のことであり、ここが「ほかげ花やかにて」であって差支えない。大殿油に照らされた姿は「はなやか」と言ってよいであろう。この時の中の君は「細やか」がよいか「花やか」がよいか。下着だけで「細やか」な中の君は、親しめる感じを浮舟にもたせたであろう。宮家の明かるい大殿油は、中の君を宮の御方らしく見せて、浮舟をひきつけたことであろう。

○このきみは――このあとに、絵詞は長文を省略する。絵詞に掲げる以前の場面、匂宮との事件とのつなぎの部分である。

「まことに心地もあしくなりにたれど、めのと、『いとかたはらいたし。事しもあり顔に思すらむを、たゞおほどかにて見え奉り給へ。右近の君などには、事のありさま、はじめより語り侍らむ』と、せめてそゝのかし立てて、こなたの障子のもとにて、『右近の君に物きこえさせむ』と言へば、立ちて出でたれば、『いとあやしく侍りつる事の名残りに、身もあつうなり給ひて、まめやかに苦しげに見えさせ給ふを、いとほしく見侍る。御前にて慰め聞こえさせ給へ、とてなむ。あやまちもおはせぬ身を、いとつゝましげに思ほしわびためるも、いさゝかにても世を知り給へる人こそあれ、いかでかは、と、ことわりにいとほしく見奉る』とて、引き越して参らせ奉る。われにもあらず」以上省略。

絵巻詞書が、この長文を略したのは、匂宮との事件はさておいて、浮舟が中の君の御前に出た姿、それを見る中の君の思いに焦点をおこうとしたことになろう。

○ひとのおもふらんこともはづかしけれど、いとやはらかにておほどきすぎたまへるきみにて、おしいでられて、ゐたまへり――諸本「いとやはらかにおほどきすぎ」と「て」がない。異同は、この一字のみ。

○ひたゐがみなどの、いたうぬれたるをもてかくして、――青表紙本「を」なし。別本と河内本と「を」あり。

○ひのかたにそむきてゐたまへるさま――諸本は「ひのかたにそむき給へるさま」とする。「てゐ」の二字がない。異同はこの二字のみ。

○うへをたぐゐなくみたてまつるに、けやおとるともみえず、あてにをかし――青表紙本「けおとる」と「や」がない。異同はこの一字のみ。河内本「をとる」で、「けや」二字なし。

○これにおぼしうつりなば、さまあしげなることもありなんかし、いとかゝらぬ人をだに、めづらしき人、をかしがりたまふ御心を、と、ふたりばかりぞ、えはぢあへたまはざりける――異同が多く、とくにこの文末は絵詞では解しにくい。

青表紙本「これに思しつきなば、めざましげなる事はありなんかし」匂宮が浮舟に思いをかけると、見ていられないことが起ころう。絵詞だと、中の君を袖にするという所までゆくのだろう。それだと、いい笑いものになる覚悟もいるであろう。

青表紙本「いとかゝらぬをだに、めづらしき人、をかしうし給ふ御心を」と「人」が片方だけなのは、よい。「をかしがり」より「をかしうし」の方が、おだやかであろう。

青表紙本「と、二人ばかりぞ、御前にてえ恥ぢ給はねば、見居た

りける」女房二人ほどが、中の君の御前のこととて顔を隠すことも浮舟はできない、それで、上文の感慨を以て見ていた、というのである。この「二人ばかり」とは、絵詞に掲出される以前の物語本文に徴すれば、少将と右近である。右近は、宇治以来の老女大輔のむすめである。そしてこの二人が、浮舟の災難を中の君の前で噂している、その情景から察すれば、二人は同年輩で、中の君のお気に入りの、おそば去らずの若き人人であろう。ちなみに絵巻には女房が三人かかれている。それについては項を改めて述べる。

○ものがたり、いとなつかしうしたまひて――諸本「なつかしく」

○れいならぬところなどなおもひなしたまひそ――諸本「れいならずつゝましき所」のほうがよい。「れいならぬ所」では舌たらずである。別本池田本「れいならぬなどつゝましうな思ひなし給ひそ」

○めひめぎみのおはせずなりにしのち――諸本「故姫君」。「め」は「こ」の誤りとしなくてはならない。

○わすらるゝよなきに――諸本「忘るゝよなくいみじく、身も恨めしく、たぐひなき心地して過ぐすに」。絵詞でも通じないではない。

○いとよくおもひよそへらるゝおほむさまをみれば――諸本「よそへられ給ふ御様」。この「られ」は受身、「給ふ」は浮舟に対する敬語である。絵詞の「らるゝ」も受身。絵詞には「給ふ」がないが、下に「おほむさま」と敬語があるし、よろしかろう。

○いとあはれに、なぐさむ心も、いとあはれになむ――諸本「なぐさむ心地していとあはれになむ」。絵詞の「御様を見れば、いとあはれに、なぐさむ心も」までは通じないでないが、そのあと「いとあはれになん」と同語をくり返したのは、困る。

○おもふ人はさらになきみに――青表紙本「思ふ人もなき身に」だが、別本の御物本・保坂本・池田本と河内本は「思ふ人もさらになき身に」で絵詞に近い。

○むかしのおほむこゝろざしなきやうにおぼさば、いとうれしくなん――諸本「昔の御志のやうに思ほさば」。「絵詞」なき」と否定するが、それでは意が通じない。

○などかたらひたまへば――諸本「語らひ給へど」。これは「ば」でもよい。別本の御物本・陽明家本・保坂本・池田本は「ば」である。

○いとものづゝみして――諸本「物つゝましくて」。別本の御物本・保坂本は絵詞と同じ。

○またひなびたる心のいらへきこゆべきこともなくて――諸本「心にいらへ聞こえむことも」。別本の高松宮家本・宮内省図書寮本・国冬本「心の」。

○としごろ、いとはるかにのみおもひきこえさせしに、かくみたてまつるは、なにごともなぐさむこゝちしてなん――青表紙本「かう見奉り待るは」。河内本「かう見奉れば」であり、別本の御物本・高松宮家本・保坂本・池田本・国冬本は「見奉るは」と絵詞と同じ。諸本「心地し待りてなむ」。別本の御物本・図書寮本・池田本「心地してなむ」と絵詞と同じ。

○とばかり、いとわかびたるこゑにしていふ――青表紙本「声にて言ふ」。

○ゑなとりいでさせたまひて――青表紙本「絵など取り出で、河内本「絵などとうでさせて」。絵詞は「と」一字脱か。

○右近にことばよませてみたまふに、ものはぢもえしあへず――諸本「向ひて、物恥ぢもえし給はず」。「向ひて」のないのに陽明家本、「給は」のないのに御物本・池田本がある。

○心をいれてみたまふに、ほかげ――青表紙本「心に入れて」。絵詞の「心をいれて」はおかしい。　青表紙本「見給へる火影」。絵詞でも通じる。
○さらにこそとみゆるところなく、こまかにをかしげなり――青表紙本「さらにここと見ゆる所なく」。絵詞では通じない。別本の御物本・高松宮家本・保坂本・池田本・国冬本と河内本「さらにこここそと」とあるから「こゝ」の誤脱であろう。河内本の大島本「ここそと」で、これでも通ずるから「こゝそ」の「ゝ」脱とも見られる。
○ひたゐつき、まみの、おほどかにかをりたるこゝちする、たゞおもひいでらるれば――諸本「おほどかに」はなく、「かをりたる心地して、いとおほどかなるあてさは」と下に出る。ここは絵詞でも通じる。　諸本「たゞそれとのみ思ひ出でらるれば」。
○ゑはめもとまらず――諸本「ゑはことに目もとどめ給はで」。
○それとのみ、いとあはれなるひとのかたちかな――青表紙本では、前にある「それとのみ」という語が、絵詞はこちらにある。こちらであっても、わからないことはないが、無理は無理である。
○さて、かくしもありけるならん――諸本「いかでかうしもありけるにかあらん」。「さて」は通じにくい。「いかで」とありたい所である。
○こみやのにたてまつれるなめりかし――諸本「故宮にいとよく似奉りたるなめりかし」。絵詞は「の」を「に」を訂正している。「に」とすれば、通じることは通じる。
○こひめぎみは、宮のおほむかたざまに――ここは異同なし。
○我をはうへにゝきこえたるとこそは――諸本「われは母上に似奉りたりとこそは」。絵詞でも通じる。
○ふるびとゞもいふめりしか――青表紙本「言ふなりしか」。別本の高松宮家本・陽明家本・保坂本・国冬本と河内本が、絵詞と同じく「言ふめりしか」である。
○げにゝたるは、いといみじきものなりけり、と、おぼしくらぶるに――青表紙本「げに似たる人はいみじき者なりけり」。別本の池田本は「人」がなく、御物本・保坂本・池田本と河内本は「いと」がある点、絵詞と同じ。
○なみだぐみて、みたまふ――異同なし。
○これは、かぎりなくあてにけだかきものから――ここは、姉君について言っているのだから、「これは」は、おかしい。下文に「これは……」と浮舟について言ってもいる。諸本の「かれは」がよろしい。別本の陽明家本も「これは」であるが、絵詞と同じ誤りである。
○かたはなるまで、なよびたまへりし――青表紙本「なつかしうなよゝかに、かたはなるまで、なよ〳〵とたわみたるさまのし給へりしにこそ」。絵詞は簡略であるが、意は通じる。なお別本の池田本と河内本は、青表紙本の「なよゝかに」の所が「なよびかに」で、絵詞の「なよび」と通ずる節もある。
○これは、またもてなしなどの――浮舟のことを言っている。「など」は青表紙本にないが、別本の御物本・保坂本・池田本・河内本にはあって、絵詞と同じである。
○よろづのことをつゝましとのみおもへるけにや――諸本は、この前に「うひ〳〵しげに」とある。また「つゝましうのみ思ひたるけにや」とある。別本の御物本・保坂本・池田本は「つゝましと」とあり、そこは絵詞と同じである。
○もてなしなどの――この七字前と重複。後文にも重出。

○みどころあるもてなしなどぞおとれるここちする――諸本「見所多かるなまめかしさぞ」。絵詞でも通じる。　青表紙本「劣りたる」、別本の御物本・高松宮家本・保坂本・池田本・国冬本と河内本「劣りたる心地しける」

絵詞は、ここで切れるが、文がおさまらない。青表紙本は、このあとに「ゆゑ〳〵しきけはひだにもてつけたらば、大将の見給はむにも、さらにかたはなるまじ、など、このかみ心に思ひあつかはれ給ふ」とある。

「絵巻」略解

絵巻物は、左にひらきながら、右を巻きながら、見てゆく。それで、目は右から左にと動いてゆく。「源氏物語絵」は大和絵の代表作とされるけれども、いわゆる絵巻物と時代を同じくするけれども、巻物ではない。一枚ずつの絵ではあるけれども、右から左にと見てゆくものとして、奥に左に主要な人物の出るのを順勝手とし、右にすぐ主要な人物が出るのを逆勝手と呼ぶ。宿木第三段の如きは逆勝手の最たるものであり、匂兵部卿と中の君が右上に対座して、左は秋草のなびく夜の庭である。宿木第二段は右に匂兵部卿と夕霧の六の君をおくが、左半分あまりに女房五人を上下に配し、夕霧邸の華麗さを示し「心えぬまでぞ、好みそし給へる」夕霧大臣のもてなしざまを見せる。宿木第一段は、右に今上と薫の碁を打つ姿を描いて宮中の一室を示し、左に女房二人をえがく。宿木の巻の第一段と第二段は、宮中の、あるいは大臣邸の華麗を示すために女房を描いたと言える。

この東屋第一段にも、女房が右に二人、中央に一人かかれている。中央の一人は、詞書をささげて読むから、絵詞に言う右近であるが、右の女房二人は、絵詞には明記されない。

絵詞に「二人ばかりぞ」とある。物語本文によれば、右近と少将である。物語本文に従い、また絵詞のままに描けば、右近のほかに、もう一人女房を描けばよい。

宿木第二段は、絵詞に「よきわかきひと卅人ばかり、わらは六人、かたはなるなく、さうずくなども、れいのうるわしきことも、めなれておぼされぬべかめれば、ひきたがへ、こゝろえぬまでぞ、このみそしたまへめる（「たまへる」の誤）」とあるのを、女房五人で代表させたのである。宿木第一段は、絵詞にも物語本文にも女房が控えているとは書いていない。書いていないけれども、主上のいる所には、女房の控えているのは自明のことなのだ。高麗縁の畳の上に繧繝縁の畳を重ねて主上の座とすることも、絵詞にも物語本文にも書いていない。御座の左に二階棚あり、その上階に火取香炉を下階に打乱箱をおくことも同様である。後方に副障子あり、左方に大床子あり、障子の左に厨子棚一双あり、妻戸あり、いずれも同様、自明のことなのである。左の女房二人が、裳唐衣の皆具の装束なのもまた自明のことなのである。

東屋第一段は、正面に一段高く黒漆の框をすえ、大和絵の障子、中に繧繝縁の畳が見える。母屋であり、匂宮の見えるときの用であろう。その周囲が廂の間だが、ここも、襷を入れた大文高麗縁の畳を敷きつめる高貴さである。

それにふさわしく、右に正面をむく女房は唐衣は略したが裳をつけている。紅地に紺で三重襷の裳、引腰は、表が黄地に白の窠と霰、

裏が紺、正面に結ぶ裳紐も紺である。なお、表着は白地に唐花丸文様。衣は白。単は淡萌葱に青で繁菱文様。紅の袴。

右下の女房は、青地に白で花菱と角菱を敷目に入れた表着に、赤の単がわかるだけで、あるいは裳を引いているかも知れない。

五幅四尺の几帳は、二人の女房に表をむけるし、美麗几帳であり、もとより中の君のために立てたのである。淡蘇芳に、白で小山と立木、布筋は紺、白、萌葱の絞。

その几帳から半身を見せる右近は、黄地に白の花輪違文様の袿、黄の衣三領、赤地無文の単である。上臈の態である。

物語本文に言う少将は、右近より上席かと思う。「少将右近」と記されるから。だから少将も上臈の態であるべきであり、物語本文に「二人ばかりぞ、（浮舟ガ）御前にてえ恥ぢあへ給はねば、見居たりける」とあるによれば、少将も右近とともに几帳の内側にいるはずである。

「絵など取り出でさせて、右近に詞よませて見給ふに、向ひて物恥ぢもえしあへ給はず、心に入れて見給ふ火影」とある。近くに大殿油があったはずである。下絵には几帳の上に大殿油の上半部がかいてあったが、しあげの時ぬりけしたことが、現存の絵でも察知できる。下絵は本文に従ったのだが、絵にしてみると、ごたごたしすぎるので消したのである。

大殿油を省略したように、少将をも省略したのであろう。几帳の内に右近に並べてもう一人女房をかくのは無理である。

そう考えると、右の女房二人は、少将以外と考えるべきで、物語本文にはないが、当然いるものとして描き加えても不思議はないのである。これほどの邸であれば、女主人のまわりには、身近に、また離れて、何人もの女房がいるものなのだ。

そういう常識により、約束によって、二条の院の中の君の御前らしくするために、この絵に本文にない女房二人を描きこんだのである。大和絵の障子の如く、美簾几帳の如く、繧繝縁の畳の如く。

こうして舞台造りをおえて、左に主要人物をおく。

帽額の簾をまきあげる。さすがに「源氏物語絵巻」では、ただの簾と思われるのは東屋第二段、浮舟の隠れ住む三条の小家のみである。

中の君は、白地に菱丸文様の袿、濃色の袴には金泥で梅鉢文様をかく。白を着ているのは作業中だからである。髪を洗うという大作業をおえ、いま、女房に櫛けずらせている。その女房も白を着る。袴が紅なのは常のことである。

中の君の袴、濃色は身分の高さからか。金泥の文様は、贅沢の極である。すれて、すぐ剝げるであろうに。

中の君に対して浮舟がいる。冊子絵を前において見る。右近のささげる冊子には点をうち続けて字がかいてあることを示すに対し、浮舟の見る絵は銀泥を塗り、雲形の線を入れ、絵がかいてあることを示す。全体が天地七寸二分の小品画だから、これ以上は無理である。

浮舟は、萌葱地に青く梅鉢文様の袿、紅地繁菱の単、赤の袴である。

浮舟の前の畳の上には巻物を一巻と冊子を二冊（あるいは冊子箱とその蓋）とがかいてある。今みると剝げていて、あるいは下絵にかいて仕上げのとき塗りつぶして畳にしたかとも思えるが、江戸時代の住吉摸本（徳川黎明会蔵）は、今より明きらかに描かれている

web公開に際し、画像は省略しました

web公開に際し、画像は省略しました

ので、元来あったものである。このことについては「山岸博士頌寿中古文学論考」に寄せた拙稿「源氏物語絵巻詞書について――誤写訂正の問題――」に触れ住吉摸本の写真も載せたから、この程度にとどめる。

この絵で右近が詞をよんでいるのは、中の君のためなのであって、浮舟は無関係の絵を見ているのだ、という説があるとのこと。その詳細をわたくしは知らないが、中の君は浮舟の心を慰めるために呼びよせ、話しかけ、接待のために「絵などとりいでさせ給ひて、右近に詞よませて見給ふ」のだから、無関係の絵を浮舟に見させているとは思えない。それでは客に対して余りに失礼である。

ただし、浮舟が絵を見ていることは「もの恥ぢもえしあへず、心を入れて見給ふ」とあるから明きらかだし、中の君も同様に絵を見ていることは「たゞ（姉宮ガ）思ひ出でらるれば、絵は目もとまらず」とあるから、これまた明きらかである。一つの詞に対応する別冊の絵が二部あったのであろうか。そうは思えないから、多分、中の君と浮舟は、一冊の絵を二人一しょに見ていたのであろう。並んで見ていたのであろう。それを描くのに、このように上下に二人を配したのは、構図上やむをえなかったのであろう。

わたくしは、この東屋第一段の絵を以て、物語は、別冊の絵を見ながら、女房に本文を読ませて聞くものであった、という仮説を、そのまま絵にして示してくれたもの、と考えた。しかし物語の本文には「絵など取り出でさせて、右近に詞よませて見給ふ」とあり、「物語」という語はない。だから、ここは、物語鑑賞法には関係ない、詞の添った絵を鑑賞する場面なのだ、という反論も出るかと思ったが、今までのところ聞かずにいる。

文によって、その文の現わす事を考えるのが、後世の学者の常とする所である。が、ある一事を、当時の人が文で現わすばあい、どういう文になるか、という、逆の考え方をする必要もある。いま普通にする所を、上から文を見下ろす方向とすれば、逆に、その文の出来て来るゆえんを、文の内がわから見上げる、とでも言おうか。わたくしの仮説は、そういうことを試みたものなのである。

ここに掲げた「源氏物語絵巻」東屋第一段の白描画は、拙著「訳注源氏物語」（角川文庫）第十巻の付録のために作成したものである。そこには簡略な絵引を添えるが、詳細な絵引も近く別に刊行する。

（大阪府立女子大学教授）